（横光安逸への道よりは錯覚は惨しい）

夏祭り（盆地の街）

遠き過去を憶ふ記憶（あの日の二本七）
それも意志へと移送することのない共智と逃避、

月は涼かな音もなき光を漲らし
海よりの風は届きませんけれど
私達は生きてきた、
おか暑くて飲らは生きてねむりのかたろうか？
今宵焼けあとの中洲のほとりにあたたかな京踊民謡の
ブールのようなみどり

テントばりの拝殿をつくりのぼりを立て
群れ泳ぐ橋が歪んだ仮橋であっても
踏みゆく瓦礫が原子熱線のただれをのこしていることも
昔ながらの燈籠みが一面焼けただれた木の根株から芽吹いていることも
あることも、サクセンがセランと芽ぶいた西や南田の村にあることも
みんな おりあのとこの様ん思え
忘れてしまえたのよう様ん

今宵人々はあたかも楽しいことがある様に
屋台は見られぬ生々とした表情で、少女は不思議なうすものを
身につけ若い男は草履に浴衣かけ
何処から来たる家庭もふれ合いは人を律き安らい（やっと酔い出したとスツと喧嘩の声）急でしらんの
電灯と紙飾りのもとで神楽は粉装貴々しく「天の岩戸」
を踊り出で続け、人でみの構はつれては命い満月の光りに濡れて
若い人らが動かない
更ければやがて世のうい太鼓の音を中心んでほてての路上で
踊りの輪がひろがることであろう。
（共智が餘裕を錯覚した踊りつづける。）

23.9.20